

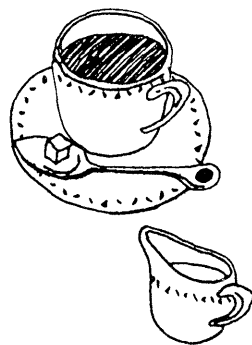
「宝の盆」

近藤伊津子・編

あるところに賭ごとの好きな男がいました。毎日、毎日、賭に夢中で、家に帰りもせず、病気のおかみさんも、息子をも顧ることをしませんでした。近所では「賭けぐるい」とその男のことを言いました。

その男は十回賭けると、九回は負けるといふ調子だったので、家の中にあるものは手当り次第、金に換えてしまいました。家の中はもう何んにもなく、とうとう、米一粒もなくなりました。

おかみさんの阿玉は仕方なく、掛けていた布団を売



り、米を買うように頼み、

「息子の小宝を見て下さい。かわいそうに、ご飯を食べさせないと、病気になってしまいますよ。賭はしないでください。」と言うと、

「はいはい、もう二度としないよ」と調子よくその男は言うのでした。

けれども、夜になると、布団を売った金を握って出かけてしまいました。阿玉と小宝は、空腹のまますごしました。

夜が明けると阿玉は小宝に、山へ行つて、果実か何か、腹の足しになるものを探してくるよう言いました。

小宝は山に行きました。たわわに実をつけた桃の木をみつけ、すぐに木に登り、桃を五つほど取りました。けれども、とった桃を入れるところがありません。小宝は木から降りて、何か、入れものになるものはないかと、そこらを探してみました。

そうしていると、草むらの中に、何やら黒光りするものがあります。小宝が手に取ってみると、ずっしりと重

いお盆のようなものでした。

さっそくその盆に、取った桃を入れましたが、そのうち二つを食べてしまいました。

桃を食べてしまつて小宝が、ひよいと見ると、ちゃんと盆の上には桃が五つあるではありませんか。

「あれ！どうしたのだろう。二つたしかに食べたのに……」

小宝は、また桃を二つ食べました。ところが、やっぱり盆の上には五つの桃があるではありませんか。

「これは宝盆だ！これからは山に桃とりに来なくても、いくらでも、いつでも桃が食べられる。うれしいな！」
小宝は大よろこびで山を下りました。

途中、つまづいて、お盆を落してしまいました。あわてて、引っくり返つたお盆を持ち上げてみると、五つの桃は地面に落ち、お盆は空っぽでした。

小宝には、この宝盆は、逆さまに引っくり返すと、盆の中のものがそっくり取り出せて、空っぽになることがわかりました。

さて、家に帰った小宝は、母さんの阿玉にこのお盆のことをはなしました。

「これはきつと、昔から話にあった『聚宝盆』に違いない。さあさあ、となりの周おばあさん家に行つて銅銭を一枚借りておいで。すぐ、返しますからって」

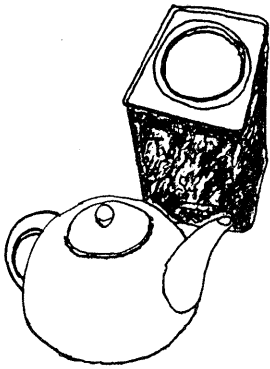
そして、阿玉は、借りて来た銅銭一枚を、お盆にのせ、それから、その銅銭を取り出しました。

「おやお盆の中に、ほんとに、銅銭が一枚……」阿玉は叫びました。

さて、それからというもの、阿玉と小宝はこの『聚宝盆』のおかげで、いいくらしを送りました。

そうしているうちに『賭けぐるい』の男がふらりと家に帰ってきました。

荒家が、すっかり新しい家に変つてるので、門前で、ぼんやりしていると、隣のじいさんが出て来て、「お前さんの家で何が起つたのか……どうして、金持になつたのか、まるでわからん。けれども、『賭けぐるい』がもどると、どうなることやら」とためいきをつきまし



た。

「賭けぐるい」の男は、又、賭金が出来たわい、とよろこび勇んで、門をたたきました。家の中に入って、

「阿玉よ、金をどうして手に入れたのかね、天から降ってきたのかね」とたずねましたが阿玉は、だまっていた。

小宝は言わずにおれなくなつて、

「おとつあん、『聚宝盆』だよ。宝盆をひろつたのだよ」といってしまいました。

「賭けぐるい」の男は、狂喜して

「何と何と！『聚宝盆』とは。オレさまは何と運の強い男か。これで金は幾らでもあるということか！」叫びながら、家の中を探しはじめました。

阿玉は『聚宝盆』を取られまいと、『賭けぐるい』の男が探し出した盆を、引っぱり張りました。

二人は争っているうちに倒れて、『賭けぐるい』の男は、こともあろうに『聚宝盆』に尻もちをついてしまったのです。

「賭けぐるい」の男は、どうにかして盆から立ち上る

うとしても、どうしても、うごけません。小宝は『賭けぐるい』の男の手を取って、阿玉は小宝の腰を抱き、うんとこしょと、力一杯ひっぱりました。それで、やっと『賭けぐるい』の男は立ち上ることが出来ました。

ところが、立ち上った『賭けぐるい』の男とは別に、相変らずお盆の上に尻もちをついたままの『賭けぐるい』の男がいるではありませんか。

小宝と阿玉はあわてて、尻もちをついている『賭けぐるい』の男をもう一度引っぱりました。そうすると、やっと『賭けぐるい』の男は立ち上ることが出来ました。

ところが、立ち上った『賭けぐるい』の男とは別に、お盆の上には尻もちをついたままの『賭けぐるい』の男がやっぱり、いるではありませんか。

こんなふうにして引張っているうちに十人の『賭けぐるい』の男をお盆から引張り出してしまいました。

十人の『賭けぐるい』の男と尻もちをついている一人の『賭けぐるい』の男を見て、阿玉は、はっと気をと

もどしました。

そこで急いで、お盆を、尻もちをついている「賭ぐるい」の男ごとひっくり返し、やっと、ほんとの「賭ぐるい」の男を、お盆からひきはなしました。

「賭ぐるい」の男は、お盆から出てくると、「金はどこにかくしているのだ！」と声の限り怒鳴りわめき、十一人の「賭ぐるい」の男たちは、部屋の中、外を走りまわり、箱をあげたり、引出しをあげたり、上に下にと大さわぎしました。そして、家中の金銀宝石をみつげ出し、お盆に入れようとなりました。

それから「賭金が、ぞくぞく出来るぞ！これからは何の心配もなく、心いくまで賭をやるぞ！」と十一人の「賭ぐるい」の男たちは叫びました。

阿玉は、あまりのことに涙が流れるばかりでした。

阿玉は、とつぜん、かなづちをとり、「聚宝盆」を「ごだん」と打ちつけました。「ほーん」と大きな音があたりにとどろき、お盆から出たもの、金、金銀宝石、そして、十人の「賭ぐるい」の男たちは、たちまちのうち

に消えてしまいました。

一人だけになった「賭ぐるい」の男は、割れた「聚宝盆」をぼんやりとながめ、「ああ、何もかもおしまいだ！」とつぶやきました。

(かつこう文庫主宰)